



Title	19-20世紀のアルハンブラ宮殿：パティオの修復とその背景
Author(s)	佐藤, 紗良
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56285
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19-20世紀のアルハンブラ宮殿 — パティオの修復とその背景 —

佐藤紗良／日本学術振興会特別研究員（大阪大学）

南スペイン、グラナダにあるアルハンブラ宮殿（以下アルハンブラ）はイスラムの人々によって建設された城壁内の王宮である。13世紀から15世紀末までのさまざまな時代のパティオ（中庭）と建築の複合体であるアルハンブラは、1492年のグラナダ陥落以降、カトリックの君主によって統治されたものの、その美しさ故にほとんどの建築物がそのまま残されてきた。

なかでもライオンのパティオは、アルハンブラにおいてもっとも精緻な装飾が施された建物に囲まれた庭園の一つで、14世紀頃に建設され、増築や修繕が進められたにもかかわらず、その空間構成はほとんど変わらないとされる。これはおもに私的な空間として機能していたパティオで、南北15.7メートル、東西28.5メートルの長方形の区画に、パティオを取り巻くように建物が建てられ、124本の円柱を使用した列柱廊が備わっている。四方の部屋は西が「モカラベの間」、南が「アベンセラヘスの間」、東が「諸王の間」、北が「二姉妹の間」となっており、パティオの東西、長方形の短辺から中心に向かってパヴィリオンが突き出している。パティオの中心では、12頭のライオンが噴水を背中に乗せて立っており、そこから溢れる水は四方から流れて来る水流と合流する。

アルハンブラは現代に至るまで何度も修復がなされており、それは各時代の修復家の思想と深く結びついたものであった。特に19～20世紀は世界的に修復・保存概念が大きく変化した時代である。本発表ではヨーロッパでの修復思想と実践を踏まえつつ、スペインにお

ける主要な修復作業、すなわちラファエル・コントレラスとレオポルド・トーレス・バルバスの、対照的にも見える修復に焦点を当て、それらを比較して各々の特徴を明らかにすることを試みている。

Rafael Contreras Muñoz (1824-1890) は、グラナダ出身の建築家、修復家で1847年にアルハンブラの装飾修復家、1869年に館長になった。コントレラスの仕事にかんしては1859年、ライオンのパティオの東側、諸王の間から中庭に突出したパヴィリオンの寄棟屋根を丸屋根に変更し、緑と白の釉薬がかかった陶器瓦を葺いた修復が特に有名である。またそれにともない、パヴィリオンの背後の諸王の間の屋根を寄棟屋根から方形屋根が三つ並んだ形に変更した。1892年の『グラナダガイド』において、その著者はコントレラスの修復の成功を讃えており、また1910年のブリュッセル万博ではスペインの象徴としてアルハンブラの丸屋根が使用された。コントレラスによる修復は、東洋的な美を伝えるスペインの象徴として世界的に知られるようになっていったのである。

対して20世紀の修復家、Leopoldo Torres Balbás (1888-1960) はマドリードで生まれ、今日、スペインにおける修復の父の一人であると位置づけられている。トーレス・バルバスは科学的修復の先駆者と言われ、手を加え過ぎぬよう注意を払いながら、可能な限り歴史的事実に沿うように修復した。現在のアルハンブラの建築物の多くが彼の修復に依るものであるが、1934年にライオンのパティオの丸屋根を方形屋根にした修復は当時批判され、

抗議の手紙が送られた。またグラナダの新聞 IDEAL 紙の1935年1月15日の記事では、主にコントラスの丸屋根が高く評価された反面、トーレス・バルバスによる方形屋根への再修復が批判されたと書かれている。同記事では、それまではライオンのパティオの噴水と丸屋根がアルハンブラを代表するイメージを形成し、その屋根の独創性故に写真家や画家が好んで訪れていたとされている。またコントラスが屋根部分に釉薬のかかったセラミックを使用していたのに対して、トーレス・バルバスはイスラム統治時代のように、素焼きに近い赤茶けた瓦屋根に戻した。トーレス・バルバスは、コントラスの修復を歴史的根拠がないものとし、可能な限り排除したのである。

彼らの修復理念はその発言から辿ることができる。コントラスは、科学的調査と歴史的事実によって屋根を修復したとし、「直線の軒を避けること」と「構成要素の多様性」という点において丸屋根及び三つの方形屋根にする歴史的正当性を証明しようとした。これは造営当初のオリジナルのライオンのパティオを意識し、過去の完璧な姿を現前させるという意味において同時期のフランスの建築修復家ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュクに極めて近い立場と言えよう。

一方トーレス・バルバスは、そうしたコントラスの修復はコントラス自身が目指した造営初期の形ですらないとし、歴史的建造物は考古学的・芸術的価値があるため、補修し、その状態を存続していくことがこれからの修復の形であると考えた。パヴィリオン屋根を、元々そうであったと考えられる寄棟屋根ではなく方形屋根にしたものなるべく手を加えないためであったと考えられる。また、過去の建築方法や建築物全体の確実な記録がある際には大枠を造り直すことは許されるが、

手を加えた箇所はオリジナルの部分と区別できるようにし、後に研究対象として扱うとき、時代区分を明確に判断できるようにする、とした。これはイタリアの修復家、カミーロ・ボイトの理論から影響を受けている。建築物の保存・修復の研究者ユッカ・ヨキレットによると、トーレス・バルバスはアルハンブラの修復作業にあたり、この方法を1923年から用いていた。彼はヴィオレ＝ル＝デュクに触れながら、スペイン内での修復の状況をやや否定的に述べているが、これはコントラスを意識した批判であると考えられる。またトーレス・バルバスは、コントラスとは逆に、16世紀の膨大な文書と実地調査から、自身の修復に確信があるとしている。

19世紀の修復家コントラスは本人が述べている限りにおいて、歴史主義的解釈に基づいて修復を進めていたが、その実証が不十分なため、現在、彼のイスラム建築のイメージを意匠的に建築に組み込んでしまった夢想的な修復であったと考えられている。20世紀の修復家トーレス・バルバスは綿密に過去の状態を調査し、造営初期の形ではなく、歴史的過程とその真实性を重視したが、結果として自身が想定した屋根とはやや異なる修復となった。一般的にアルハンブラの修復は、ヨーロッパ的な「修復」と「保存」という二つの潮流の対立と軌道を同じくしてきたかのように思われる。しかしアルハンブラの修復は、ヴィオレ＝ル＝デュクからボイトの論へと流れつつも、その歴史の複雑さとオリジナルの不明確さ故にさまざまな変化を経てきた。アルハンブラは造営時の姿をとどめると考えられがちだが、実際は先述したような修復や改築が重ねられてきたのである。国内外から多くの訪問者を集め続ける遺産であるだけに、その「修復」の歴史はより確実に把握されるべきであろう。